

グランド現代百科事典

Grand Gendai

28

ミツカーヤシキ

学研

グランド現代百科事典

Grand Gendai

28

ツーカーヤシキ

1983年6月1日 改訂新版第1刷発行

1984年2月1日 改訂新版第2刷発行

全巻セット定価 218,000円

編集・発行人——鈴木泰二

発行所——株式会社学習研究社(学研)

東京都大田区上池台4-40-5 〒145

電話 東京(03)720-1111 (大代表)

振替 東京8-142930

印刷——凸版印刷株式会社

表紙クロス——東洋クロス株式会社

ケース見返し用紙——富士共和製紙株式会社

本文用紙——三菱製紙株式会社

箔押——有限会社斎藤商会

製本——凸版製本株式会社

製函——高田紙器工業所

©GAKKEN 1983

*本書内容の無断複写を禁ず

*この本に関するお問合せ、製本上のミスなどが
ございましたら、下記あてにお願いいたします。

文書は 東京都大田区上池台4-40-5 (〒145)

学研・ユーザーサービス部「グランド現代百科」係

電話は 東京 (03) 720-1111 (大代表)

本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の
1地形図、20万分の1地勢図を使用して調製したものである。

Printed in Japan

161 278

ISBN4-05-150103-5

◆ 別 刷 目 次

《巻頭口絵》	● ミクロ	● 明治時代	184
	● 民族	● メソポタミア文明	237
《別 刷》	● 南アメリカ	● 桃山美術	341
	● 室町時代の美術		181

民族の 心に響く音楽

構成と文／藤井知昭

世界の諸民族の間には、限りなく多様な音楽が生き生きと、歌われ、奏でられている。何一つ楽器を用いることなく、自らの歌だけが唯一の音楽として存在する民族もあれば、ヨーロッパのオーケストラに匹敵する大編成の楽器群を用いた精緻なアンサンブルを楽しむジャワ島やバリ島の人々によるガムランの音楽もある。アラスカのエスキモーやアフリカのピグミー、乾燥の砂漠に暮らすベドウィン、湿润の水田農耕を生業とするタイ人など、人間の暮らしとともに、どこにでも音楽は脈打っている。どの音楽も、民族や社会集団の中ではぐくまれた貴重な文化である。どの音楽が高級で、どの音楽が野蛮であるというような価値判断や、序列をつけることは全く不要である。諸民族のなかで継承された1つ1つの音楽に耳を傾けるとき、民族による異なった文化を理解する一歩が始まり、私たちの音楽の世界は、豊かに広く開かれていくにちがいない。

太鼓を打つバランガ族の男 アフリカ南部にバンツ族系のバランガ族がいる。太鼓などの打楽器が彼らの音楽の中心となっている。

(ジンバブエ) 写真／芳賀日出男







■ 打ち鳴らす——太鼓

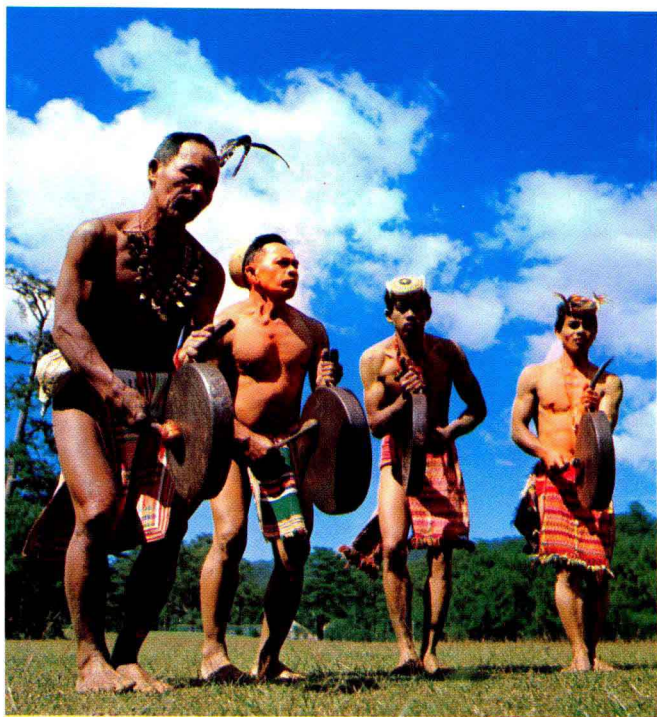
能登や諏訪の大太鼓の高鳴るとどろきは、気分を勇壮にさせ、相撲の小太鼓やお神楽の太鼓の軽妙な響きは、心を浮きたたせる。世界には、様々のものを打ち合わせて鳴らす楽器が限りなく多様にあるが、その王者は太鼓である。双方の手や身体、生活に密接した道具類など、いずれも打ち鳴らせば音を発する。だが、音を発することを目的とした機能をもつ道具となるとき、それは楽器になる。木の幹をえぐって作る割れ目太鼓もあるが太鼓の多くは動物の皮を張って作られている。太鼓は躍動する生命のリズムを作り、その響きは空間を支配し、人々の集合のあかしとなる。民族固有の太鼓は、それぞれの民族を鼓舞する力をもっている。

(右上) 割れ目太鼓を打つ男 メラネシアのフィジー諸島で行われるカバ汁を酌み交わす儀礼において、太鼓奏者は重要な役割を占める。メラネシアをはじめ、オセアニアには、木の幹をえぐり、割れ目をつけたり、木の幹を短く切り取ったまま、ばちでリズムを作る太鼓が多い。(フィジー)

(右下) ケトゥル＝ドラムを打ち鳴らす男 熱帯アフリカと呼ばれるケニアの西方ウガンダは、カラモジョン系諸族の生活の場である。旅人を迎え、伝統的な踊りで挨拶をする男たちは、頭にダチョウの羽根を飾り、片手に提げた太鼓を打ち鳴らす。(ウガンダ)

(上) シングシングの祭り ニューギニアの高地に暮らす人たちの間に行われる祭りにシングシングがある。部族間に起こる戦いの勝利を祈り、戦勝を祝って男たちによって催される歌と踊りであった。念入りに化粧し、極楽鳥の羽を頭につけた人々は、片面に皮を張った胴のくびれた細長い太鼓をたたき、勇壮に踊る。(ババア＝ニューギニア)





(右上) **太鼓を打ち鳴らす行進** タイの音楽は、インドと中国両方の要素をもち、東南アジアに共通する合奏の形態をもっている。タイには、女性ばかりで室内で合奏するマホリという形と、男性だけで屋外でにぎやかに奏するピーバットという合奏の形がある。この太鼓の行進は、後者の変形の1つで、儀礼用の行進に用いられている。(タイ)
 (右下) **杖鼓(チャング)を打つ男** 朝鮮半島の音楽は中国の影響を深く受けるとともに、日本とも共通する音楽をはぐくんでいる。両面太鼓であるチャングは杖鼓あるいは長鼓とも記され、中国の腰鼓の一種だった杖鼓が伝わり、大型となったとされている。(韓国)

(左上) **イゴロット族の戦闘ダンス** ルソン島北部の草原に暮らすイゴロット族は、ほぼ3万人といわれる。その戦闘用ダンスは、どらを片手に提げて踊り、リズムは複雑である。いくつかのリズムパターンを、何人かで分担して打ち分け、その複雑なリズムを楽しむ。(フィリピン)
 (左下) **ダルブッカを打つ男たち** 膜が1面だけの太鼓で、陶器・つば・花瓶などの形の胴をもち、それらの底に当たる部分に皮が張られている。この片面壺型太鼓はイスラム世界に広く分布し、ダルブッカ、グラブッカ、ドンバック、ゼルバガリなどとも呼ばれている。(モロッコ)

写真/芳賀日出男・藤倉明治・オリオンプレス





2



1



3



弓でこする——弦鳴楽器

古代シュメールの遺跡から出土するハープをはじめ、弦を用いる楽器は古くから人々の中に生き続けていた。弦をはじいて音を出すものもあれば、弓で奏する楽器もある。むせび泣くように奏でられるジプシーのバイオリンに象徴されるように、弓で弾かれる楽器は一際情感にあふれるメロディを響かせる。ライラとマジュヌーンの悲恋詩を奏でるアフガニスタンのヒチャック、イスラムの聖者の巡礼を語り継ぐモロッコのカマンジェ、これらの弓奏の楽器の多くは、叙事詩とともに奏されてきた。1本の弦にすべての音の世界を築く楽器もあれば、数本の弦を技巧的な弓遣いで演奏する楽器もある。それぞれの民族の繊細な想いを奏でるのが、弓奏の弦鳴楽器である。

①ルバブを弾く男 砂漠の勇士ベドウィンをはじめ、アラブで広く使用される1弦もしくは2弦の楽器で、ウードとともに古くからアラビア音楽を代表している。胴の下部をひざや地面で支えて演奏し、ややかすれた音だが、情感の豊かな音楽を生み出す。(イラク)

②カドゥルカを弾く老人 ヨーロッパの南東、バルカン半島にあるブルガリアは、早くから地中海文化の影響を受け、スラブ系のブルガリア人が多数を占めている。音楽的には、トルコやアラブと深くかかわっている。カドゥルカは、グースラとともに民俗楽器の代表格で、民俗舞踊ホロなどの伴奏に活躍する花形でもある。(ブルガリア)

③ケマンチェを弾く男 古代ペルシア以来輝かしい音楽の伝統を築いたイランの音楽は、高度な音楽理論を背景に精緻な技法をもつ芸術として伝承されている。撥弦楽器の多いなかで、ケマンチェは貴重な役割を担っている。古典音楽をはじめ、民俗の音楽でもしばしば用いられている。(イラン)

④ラーバブを弾く男 熱帯アフリカの戦士マサイ族は、ケニアの北部高地地帯からタンザニアの中部平野にかけて居住する。タンザニアにも何種類かの弦楽器があるが、弓奏の楽器は1弦から5弦までのものがある。マサイ族は、比較的陽気で、ダイナミックに演奏して音楽を楽しんでいる。(タンザニア)

写真／芳賀日出男・藤倉明治

■ はじく —— 弦鳴楽器

滅びゆく平家の悲しみを、弦に託して語る平家琵琶は、ユーラシアを越えて広がるリュート系の撥弦楽器である。アラビアのウードを祖型と考える楽器の系譜は、東方に琵琶楽の、西方にリュートやギターの音楽をはぐくんできた。リュート系の楽器であるリュート、ギター、バイオリン、琵琶などは、胴と短い棹から成っている。これに対して、長い棹をもつタンブールなどは、ピック(義甲)や指ではじいて演奏されるものが多い。ツイター系の楽器は、何本かの弦が胴の端から端まで張っており、胴が共鳴箱になっていて、ユーラシアを中心に演奏される機会が多い。

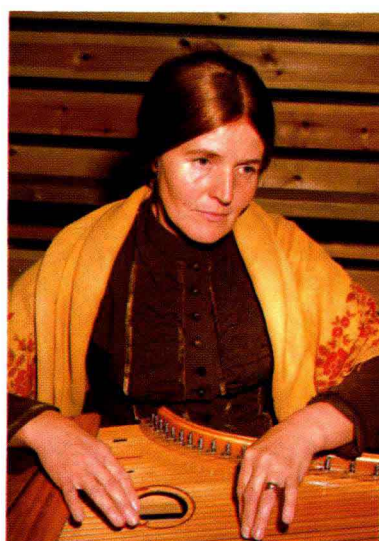
- ①リュートを弾く男 リュートは、ヨーロッパに広く分布し、ヨーロッパ音楽の発展に深く影響を与えた。(キプロス)
- ②フラメンコの踊り 伴奏に使われるギターは、即興性と歯切れよいリズムで、情熱的な表現にふさわしい。(スペイン)
- ③サントゥールの野外演奏 細長い2本のばちで演奏され、ピアノの原型の1つと考えられる。(イラン)
- ④カンテレの演奏 弦の少ない素朴なものから発達し、高度な演奏ができる。(フィンランド)
- ⑤伽倻琴(カヤゴ)の演奏 朝鮮半島の代表的民俗楽器の1つで、中国や日本の琴と同系統のものである。(韓国)

写真/藤倉明治・芳賀日出男

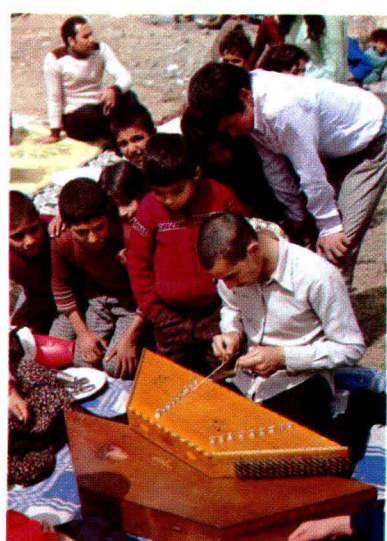




5



4



3





(左上) パン＝パイプを吹くアンデスのインディオ ギリシア神話の半獣神パンが用いたということから、パンの笛と呼ばれ、ギリシアをはじめ古い時代から使用されている楽器である。東欧・東アジア・オセアニア・南米など広い範囲に分布し、インディオの吹く愁いに満ちた音色は、遠い昔をしのぶようでもある。

(ボリビア)

(左下) ガイータを吹く大道芸人 モロッコの南の都マラケシュのメジーナ（旧市街）にジュマ＝エル＝フナの広場がある。この広場には、様々な大道芸人が集まり、アラブ人やベルベル族などいろいろな人種でにぎわう。この広場に一際高く鳴り響くのがガイータである。日本のひちりきと同じ系統のダブルリードの楽器で、北アフリカをはじめ、中東・インドなど、イスラム圏を中心に広く分布している。

(モロッコ)





吹き鳴らす——笛

多くの民族により、様々な形や音色の笛が用いられている。日本における笛は「吹き柄」から生まれたと伝えられるように、管による楽器の意味である。笛の音色は、しみじみと訴えるものもあれば、高らかに鳴り響くものもあり、人間の心の色合いでもある。アルプスの山々にこだまするアルプホルン(アルペンホルン)、地底のうなりのようにヒマラヤの峰に響くラマ教のジャンドウン、アンデスのケーナなど、とりわけ山地民の中で笛は愛されている。

(右上) **アルプホルンの合奏** スイスやドイツのアルプス地方の牧人に愛用される1～4mの長い管をもった楽器で、木や皮で作られている。羊の群れを集めたり、山から山へ呼びかけたり、数本組み合わせ、合奏したりする。その悠揚として迫らぬ響きは、いかにも牧歌的で、アルプスにふさわしい。(スイス)

(右下) **バックパイプを吹くスコットランド高原地方の人** スコットランドの軍隊で用いられるバックパイプは有名だが、ヨーロッパをはじめとする地中海沿岸地方などを中心に広く使用されている。小羊の胴体などで作られた風袋に送りこまれた空気を、数本のリードのある管に送りこんで鳴らすもので、にぎやかに響きわたる。(イギリス)

■ 民俗楽器の合奏

いくつかの楽器を、同時に、あるいは交互に演奏する合奏形態には多くの種類がある。どのような楽器の組合せを楽しむかは、民族の音に対する好みによる。メロディやリズムの構造も多様で、小編成によるもの、大編成によるものなど合奏への興味は尽きない。

(上) **3つの楽器の合奏** インドの古典音楽は、北インドと南インドに伝承される2つの流れがある。北インドのヒンドゥスターニー音楽を代表するのは、小編成の(右より)タンブーラ、シタール、タブラの3つの楽器の合奏である。

(インド)

(下) **ガムラン音楽の合奏** ジャワ島とバリ島には、金属製の旋律打楽器群を中心とする大編成のガムラン音楽がある。固有の理論を背景にした合奏は、見事な調和をつくり、影絵芝居・人形芝居・舞踊などに欠かすことができない。

(インドネシア)



写真／芳賀日出男・藤倉明治



原 书 缺 页